

かささぎ通信 第149号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2025年 7月 11日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2025年6月の「森三郎の作品を読む会」では、

「村の床屋」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943年12月)

「沼」(『赤い鳥』1934年1月号)を読みました。

「村の床屋」(『雪こんこんお寺の柿の木』全二十作最後の作品)は、床屋の作じいさんの最期の日のできごとを記した作品です。

その日、作じいさんは朝から体調が悪く、今日は仕事を休もうかと思っていたところへ、子どものお客が入ってきました。子どもは長いこと病気で寝付いていて、明日から学校へ行くので伸びた髪を刈りに来たというのです。じいさんには、この少年と三年前に十一で亡くなった息子の太助とが重なって感じられました。少年は母親が村の庚申様にお百度参りをしてくれて治ったので、帰りにお礼参りをするのだと言います。じいさんは自分の息子の時も同じ様に庚申様に願をかけたのに、どうして治らなかったのだろうと考えます。自身の体調がどんどん悪くなるのに気づいたじいさんは、遠のいていく意識の中で太助が「お父つつあんがお百度参りをしてくれなかったもんだから」と言う声を聞いたような気がします。じいさんは体調を心配してきてくれた隣りのおかみさんによって、冷たくなった姿を見つけられました。

この話には何とも言えぬ不安感や不気味さが漂っていました。熱のある体で剃刀を扱うことへの危惧があったからかもしれません。読み終わった後すぐに、志賀直哉の「剃刀」の主人公を思ったという感想が出ました。志賀直哉「剃刀」(1910年)の主人公・辰床の芳三郎は先代の親方も認める剃刀の腕前で、間違いにも客の顔に傷をつけたことが無いのが自慢でした。その芳三郎が風邪で熱のある体で客の前に立ち、誤って喉に刃をひっかけてしまい、そこから見る見る血が盛り上がります。それを見た芳三郎は剃刀を逆手に持ちかえ、若者の喉をぐいと刺してしまいます。志賀直哉の表現からは、体調の悪かった芳三郎が段々と緊迫感を積み重ねていく様子が分かります。

体調が悪く、店を開けるのが難しい状況で、客の顔を剃刀であたるという状況は森三郎「村の床屋」と同じです。どちらもそんな状況で剃刀を持つ危険性ははらんでいます。

森三郎「村の床屋」の場合は、作じいさん自身の最期の時に到る気分の変化を描いています。ここで「作じいさん」というと、ずいぶん年配のような感じがしますが、本当はもともと若かったのでしょうか。太助が亡くなった後、目に見えて老け込んでいき、やけ酒を飲んだと書かれています。じいさんは何とかして息子を治してやりたかったのでしょうか。誰かのせいではなく、自分自身が息子を助けてやれなかった悔いが感じられます。親の悲しい気持ち溢れているようでした。

『赤い鳥』昭和9年1月号の「沼」は、一年生の勇吉が見る、近くに引越してきた一つ下の清ちゃんの様子を描いています。清ちゃんは小さい時に小児麻痺にかかって松葉杖を使っています。勇吉は清ちゃんのおばさんに頼まれて、一度清ちゃんと遊んだことがありますが、体の不自由な清ちゃんと遊ぶことで皆から馬鹿にされるのではないかと不安で、それ以降は清ちゃんの家の近くを通ることを避けていました。間もなくして清ちゃんは体調が悪くなり、急死してしまいました。その後、清ちゃんの家の裏手の沼に清ちゃんの家で見た熊のぬいぐるみが落ちているのに気づいた勇吉は、清ちゃんと遊んでやらなかったことがとても悪いことだったような気がしました。

坪田譲治は「森さんのお作中での傑作であり、日本での近來の好収獲」「あとに残る哀愁の感ふかいところ」は真似できないと言っています(『赤い鳥』1934)。同じ様にハンディキャップのあるこどもを描いた黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』に思いを重ねた感想もありました。今回の二作品は偶然にも子どもの病死という題材の作品でした。

〈次回予定〉8月は休会。

2025年9月12日(金) 午後一時半~三時半

「城下町」(季刊『新児童文化』復刊1946年8月)を読む